

ひとりでいるのは・・・

ヒロ子は、学校ではよく一人にいる子です。休み時間は一人で本を読んでいるか、自由ちようにマンガをかいたりしています。先生とはときどき本の話などしています。でも、みんながタレントの話をしているとだまっしてしまいます。友だちのうわさ話のときは、いなくなることもありました。それで、クラスの中で「ヒロ子はつまらない。」という人ができました。そして、ヒロ子をさける子まで出てきました。ヒロ子は、ますます一人であることが多くなり、さける子もふえていきました。

あるとき、ヒロ子はじゅぎょう中になき出してしまいました。

となりの席のアキオが教科書をわすれてきたので、

ヒロ子は見せてあげようと思いました。けれど、アキオは体をそらして見ようとしなくて、後ろの席のタカシとわらっていたのです。ヒロ子はとうとうがまんでできなくなつて、つくえにうつぶしてないてしまったのでした。

先生はまわりの子からわけを聞きました。そして、みんなに今思っていることを書くように言いました。

ミサ子は「私は、ヒロ子さんがさけられるのを見たことがあります。かわいそうだなと思いました。みんな、やめればいいのにと思っていました。」と書いていました。ケンジも「さけているのはわるいと思う。ヒロ子さんにあやまった方がいいと思う。」と書いていました。でも、さけている人を止めた人はいなかったようでした。

ユウジは「みんながヒロ子さんをさけていたので、
ぼくもヒロ子さんをさけたことがある。わるいこと
をしたと思っっている。」と書きました。アキオも
「みんながさけていたので、ぼくもさけてしまい
ました。ごめんなさい。」と書いていました。理由
がないのに、いっしょにさけていた子も多いよう
でした。

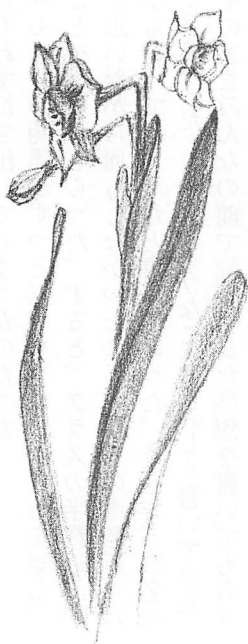
サキは「わたしは、ヒロ子はくらいからあまりすき
ではありません。すきな子と給食を食べていいとき
めた日も一人で給食を食べているので、わたしたち
のグループによんであげているのに、何もしゃべり
ません。それなのに、先生の前ではいい子ぶってに
こにこと話をしています。だから、すきではありま
せん。」
ということでした。

みんなの書いたことを読んだ後で、もう一度みんな
で考えました。

すると、ユミ子が

「本当にヒロ子さんはくらいのだろうか。わたしは
ヒロ子さんといっしょにそろばんをならっているけ
ど、そろばんじゅくでは楽しそうに遊んでいます。」
と言いました。それを聞いてミカが

「ヒロ子さんがくらいというならそれはわたしたち
のクラスがげんいんかもしれない。わたしたちがヒ
ロ子さんの気持ちを考えなかったから、クラスでは
よく一人でいたのではないかと思う。」
と発言しました。みんなもはつとした顔になりました。



ひとりでいるのは・・・（小学校中学年）

A 教材設定の理由

クラスの中には、集団に入りきれない子を時々見かける。集団の中では自分を出し切れない子、周りの人と動作や思考のスピードが違う子、興味・関心の対象が違う子など様々だが、そういう子が仲間はずれにされたり、いじめの対象とされることも、時としてみられる。そして「くらい」「自分たちと違う」ということが理由とされたりする。

そんな時、その子自身が変わることを強要されることがよくある。しかし、それはお互いを認め合えていない子どもどうしの関係がそうした状況を作り出していることが多いので、実際に変わらなければならぬのは、本人より周りの子どもたちのことが多い。そして、そんなクラスでは、誰もが周りを気にしなければならず、ほかの子どもたちにとっても窮屈で過ごしにくい場であつたりする。

どの子にとつても居心地のよいクラスにするためには、避けられている子ではなく、学級や周りの子どもたちのありようを問うことによつて、お互いに認め合える関係を作つていくことが必要だと考える。

B 教材の解説

この教材は、県内の六年の教室で起こつたできごとをもとにして、中学年用として構成した。

ヒロ子は図書室からよく本を借りて読んでいた子があつたが、友だちどうしのテレビの話やうわさ話などはあまり興味がないようであつた。でも、もともと話し好きの彼女は、先生と本の話などをしながら手伝つたりしていたので、「先生の前では良い子ぶつていふ」と言われたりするようになつた。また、グループづくりの時も、一人残つていたヒロ子に声をかけるグループもあつたが、「呼んであげた」という対等でない思いが周りにあつたために、ヒロ子自身がグループの雰囲気に入りきれないこともあつた。そうした中で、ヒロ子は一部の女の子から避けられるようになり、それがクラス全体に広がつていった。

担任は、ヒロ子の様子が気になつていたが、ヒロ子に声をかけても「だいたいようぶや」という言葉が返つてくるので、話し合いの機会をもてないまま様子を見ていた。ところが、ある日、地図帳を忘れたとなりの席の子

に自分の地図帳を間に置いて見せたところ、その子は避けるように体をそらして、後ろの子と話してしまつた。なにげない親切ささえも避けられてしまい、ヒロ子はおもわず泣き出してしまつたのだつた。

担任は、ヒロ子とみんなとの関係がずつと気になつていたことを話し、みんなの思つていふことを書いてもらつた。すると、クラスの半数近くがヒロ子をかかわいそうと思ひながら何もしなかつたこと、残りの半数近くはみんなが避けていたから避けてしまつたこと書いてあつた。そして、数名の子が「ヒロ子は暗いからきらいだ」というようなことを詳しく書いてきた。書いてあつたことをそのままみんなの前で読み、また感想を書いてもらうと、「ヒロ子さんは本当にくらいのだらうか。ヒロ子さんはそろばん塾では、よく笑つて遊んでいる」というヒロ子のことを気にかけていた子の感想が出てきた。また、それを受けて、「ヒロ子さんがくらいなのは、私たちのクラスに原因があるのではないか」という感想も出てきた。そして、クラスの子どもたちは、自分たちがヒロ子を選んだことで、ヒロ子をさらに孤立させていたことに気づいていった。子どもたちの思いを素直に出させ、それをそのまま返すことによつて、お互いの思いに気づいていくことができたのだつた。

ヒロ子自身も、はじめは、他校に仲のよい友だちがいるので、その子との中学校生活を楽しみにしていることを書いていたが、クラスに自分のことを気にかけてくれる子がいることを知り、もう少しみんなと仲良くなれるようにしたいと書いていた。その後、マンガを描くのが好きな子たちと一緒にマンガを描いている姿などが見られるようになっていった。

クラスの中で、一人でいることが多いと見られている子であつても、実は、他の子に認められたい、友だちと一緒にいたいと願つている子が多い。ヒロ子も「くらい」といわれてきたが、本当は話し好きで、話し相手を探めていながら、周りに受け入れてもらえないために孤立していったのだつた。担任は、そうした子たちの思いに寄り添い、人と人をつなぐいとなみをしていかなければならない。

C 教材の使用にあつて

授業での話し合いや子どもたちの感想などからクラスの問題点を見つけ、子どもたちをつなぐための糸口としてもらいたい。

D 授業の展開例

教師の基本発問・助言	学習内容・支援の要領
<p>1 導入</p> <p>① 今まで、友だちが避けられるのを見たことがありますか。友だちを避けたことがありますか。</p> <p>2 展開</p> <p>② 教材文を読みましょう。</p> <p>③ ヒロ子が泣き出したのはなぜでしょう。</p> <p>④ サキが「ヒロ子を好きではない」と書いたのはなぜですか。</p> <p>⑤ ヒロ子さんがくらいというのなら、私たちのクラスが原因かもしれない」というのは、どういうことでしょう。</p> <p>3 まとめ</p> <p>⑥ 自分たちのクラスが原因で、つらい思いをしている子はいないか、考えてみましょう。</p>	<p>① 自由に話させながら、「避ける」ということについて考えていく意識付けをする。</p> <p>② ヒロ子はどんな子か、解説も参考にしながらイメージさせる。</p> <p>③ 困っている友だちに対する親切さえ拒否されて、今までがまんし続けてきた友だち関係のつらさがあふれ出てきたことに目を向けさせる。</p> <p>④ 「くらい」「先生の前では良い子ぶっている」「呼んであげたのにしゃべらない」など、子どもの読みを取り上げる。</p> <p>⑤ クラスの子どもたちが、自分たちの一方的な見方でヒロ子を見てきたことに気づかせる。</p> <p>⑥ クラスの実態に合わせて、話し合わせたり、ノートに書かせたりして、ふり返る。</p>